

台風4号が白浜町を通過した2012年6月19日の翌日にさらに陸側に移動した京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に打ち上がった大型の死んだイシサンゴ(刺胞動物門、花虫綱、六放サンゴ亜綱、イシサンゴ目、キクメイシ科)

久保田 信

A large dead hermatypic scleractinian corals (Cnidaria, Anthozoa, Hexacorallia, Scleractinia), that washed ashore in the coasts of “Kitahama beach” of the Seto Marine Biological Laboratory, moved further landward on the next day after “Typhoon No. 4” passed at Shirahama town, Wakayama Prefecture, Japan on June 19, 2012.

Shin Kubota

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 (〒649-2211 和歌山県白浜町 459)

はじめに

和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”の潮間帯下部で、発見当時にほとんどその全体が砂中に埋もれていた(図1:1)両手で持ち上げられない重さのイシサンゴ(最大長径80cm、短径44cmのトゲキクメイシ属 *Cyphastrea* の一種)の1群体が、台風12号の荒波により2011年7月に掘り出され、直線距離で12.5m陸側へ移動した(図1:2)のを前報で記録した(久保田, 2011)。今回も台風でそのイシサンゴがさらに陸側に移動させられたので、その報告をする。

記録

今回、このイシサンゴは2012年6月19日に白浜町を通過した台風4号の翌日に、直線距離でさらに9.1m陸側へ移動させられていた(図1:3)。今回の移動までは図1:2の地点にあったのだが、そこは岩組に囲まれた小ホールで、当該サイズのイシサンゴなら幾つも収容できる楕円形のものである(観察日には

砂利でかなり埋まっていた)。そのホールの陸よりに最小幅30cmほどのひとつの溝があり、その溝のまわりが一番低い所で38cmと58cmの高さの2岩であるから、このサンゴが移動させられる場合、溝に大型のサンゴはひっかかるので、よほどの強い波がこないところのホールから外へ放り出されるのは難しいと推察される。このサンゴの移動経路には別の可能性がある。強い引き波によりホールの海よりに開いた幅広い溝(当該サンゴならすんなり転がり出れるほどの幅)を通過して海側にもどされてから陸側へ運ばれたと想定され、恐らくこのケースであろう。

今回の移動先のこのサンゴの落ち着き場所は(図1:3)、普段は潮の来ない潮上帯なので、今後、よほど強い波が来ても移動されにくい場所となったであろう。なお、この群体は、実習時、台風の威力を説明する一例として活用している。



図 1. 和歌山県白浜町を通過した台風 4 号の翌日にさらに陸側へ移動した (2→3) トゲキクメイシ属 *Cyphastrea* の一種 (2012 年 6 月 20 日撮影)

台風 4 号が通過した翌日の 6 月 20 日夕方に図 1 の写真を撮影したが、その時には雨は止んでいたものの波はまだ高く、“北浜”の潮

間帯全体に漂着していた多数の貝殻や木片や缶・瓶などのゴミが高波で海中へ持っていかれ、ほとんど浜から見えなくなっていた。そのかわり、綺麗に敷き詰められた砂利浜となり、主にホンダワラ類が累々と打ち上げられていた (図 1)。

引用文献

久保田 信・内田紘臣. 2011. 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に打ち上がった大型の死んだイシサンゴ目. 瀬戸臨海実験所年報, 24: 57-58.